

## 松江城下町遺跡出土の桔梗紋の

### 瓦を使用した家について

新庄 正典

#### はじめに

松江歴史館（松江市殿町二八七番地、二七九番地外）の敷地造成工事に伴い、平成一七年度から二〇年度にかけて、地下遺構の発掘調査が行われた。調査では数々の生活道具や建物の部材などが出土した。その中にはかつてあった屋敷の住人を示すと思われる家紋の入った瓦が出土している。家紋は「抱茗荷」と「桔梗」の二種類が出土しており、本稿では桔梗紋の軒丸瓦と桔梗紋を使用した家について考察する。

#### 1 出土した桔梗紋の瓦

発掘調査を行った松江歴史館の敷地は、堀尾氏による松江城築城と城下町建設によって武家町の中心として整備された一帯にあり、堀尾氏の統治期（一六〇七～一六三三）、京極期（一六三四～一六三七）、松平期（一六三八～一八六八）のいずれの時期も重臣の邸宅が配置されていた。堀尾期での屋敷の主は、元和六年（一六二〇）から寛永一〇年（一六三三）に作成された『堀尾期松江城下町絵図』によると北側の屋敷が堀尾采女、南側の屋敷が堀尾右近であった。また、京極期では『寛永年間松江城家敷町之図』によると全体が佐々九郎兵衛の屋敷となっており、松平期では幕末の文久

元年前後に作成された『松平期松江城下町絵図』によると北側が乙部九郎兵衛、南側が朝日丹波の屋敷となっている。

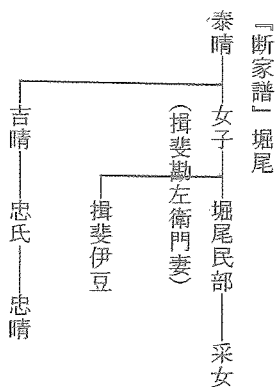
桔梗紋の瓦は四点出土しており、一つは殿町二八七番地の調査区域から、もう一つは殿町二七九番地外の調査区域からである。二八七番地出土の瓦は、最終遺構面北側屋敷の南側の廃棄土坑から、殿町二七九番地外出土の瓦は第三遺構面の池跡と調査区南端、屋敷境を示す石積溝から出土しており、これについては南北どちらの屋敷のものであるかは不明である。出土した遺構面から廃棄された年代が推定でき、二八七番地出土の瓦は一七世紀初頭から前半、二七九番地外出土の瓦が一七世紀前半から中頃にかけて使用されていたものである。推定できた年代から、この瓦を使用した屋敷の主は堀尾家の家臣であった堀尾采女、又は堀尾右近である可能性が高いことがわかった。

#### 2 堀尾采女と堀尾右近について

前項から桔梗紋を使用した人物は堀尾采女と堀尾右近の二人である可能性が高くなった。この項では、堀尾采女と堀尾右近は、堀尾家の家臣団の中でどのような地位にあり、堀尾宗家とどのような関係であったのかを考察する。

堀尾采女は名を一明<sup>⑥</sup>といひ、堀尾家臣団の中で三番目に多い石高である四千石を給していた<sup>⑦</sup>。また、「堀尾古記」<sup>⑧</sup>の記載では、藩政を執り仕切る仕置役を寛永三年、四年、八年、九年、十年（内、寛永五年と七年は不明）と長年にわたり勤めている。史料からは清水寺の棟札に造営奉行、神魂神社の遷宮の際には守護代として記載されており、堀尾家の中で重要な地位にあった人物である。また、『寧固齋談叢』<sup>⑨</sup>の中では、参勤交代途中の堀尾忠晴が京都において遊興したために出発が遅れた際、采女は忠晴が遊興している場へ乗り込み、直々に諫言したとも伝えられており、若い藩主忠晴を指導できる立場の人物であった。

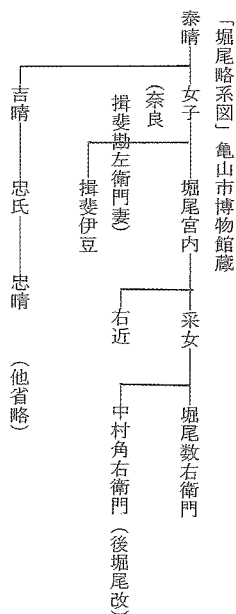
堀尾宗家との関係は、『断家譜』<sup>⑩</sup>（左記）によれば、堀尾吉晴の姉が采女の祖父である揖斐勘左衛門に嫁いだことに始まる。



勘左衛門の子宮内一信<sup>⑪</sup>は吉晴に早くから仕え、一門衆として堀尾姓を与えられ、揖斐姓から堀尾姓に改めている。宮内はのちに民部と改め、「堀尾古記」では慶長七年（一六〇二）から元和五年（一六一九）のほとんどの年に仕置役を勤めている。民部は元和六年（一六二〇）三月に死去した<sup>⑫</sup>。玉湯町の報恩寺には民部の墓と推定される宝篋印塔がある。戒名は寶山榮真大居士である。采女は民部の子であるため、民部の死去後、その役割を引き継いだものと考えられ、また屋敷地も引き継いだのであろう。

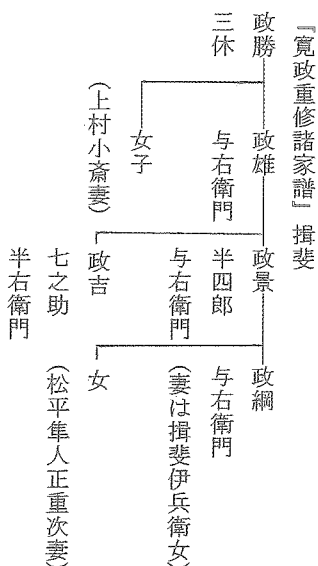
松江城下町遺跡出土の桔梗紋の瓦を使用した家について（新庄）

右近は名を一氏<sup>⑬</sup>といひ、民部の子で、采女の弟にあたる。これは龜山市博物館所蔵の「堀尾家略系図」<sup>⑭</sup>（部分左記）や後述の『揖斐家系図力』<sup>⑮</sup>に記載がある。



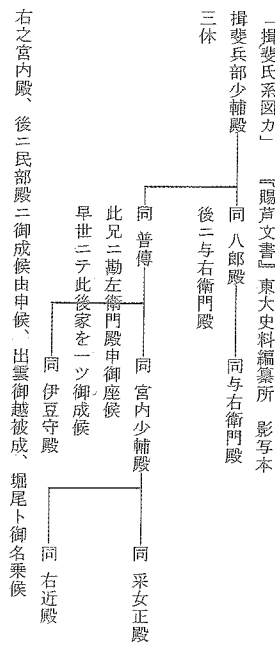
采女と右近は兄弟と考えられ、屋敷地は隣接し、馬廻りの組も同じである。与えられた禄高は采女が四千石で、右近在五百石である。家を引き継いだのは采女であると言えよう。このことは堀尾家の他の有力家臣にも共通しており、堀尾因幡と松田勘十郎（親子）、堀尾左兵衛と頼母（親子）は親の屋敷の傍らに居室を構え同じ組に入り、堀尾大隅と吉十郎（親子）、堀尾修理と彦五郎（兄弟）は同じ組に所属している<sup>⑯</sup>。

堀尾采女、右近兄弟の先祖は揖斐氏であることは前述したとおりである。『寛政重修諸家譜』<sup>⑰</sup>（部分左記）には旗本になった揖斐氏の記載がある。



桔梗と黒餅を家紋としていた揖斐与右衛門政雄は、始め織田信雄に仕え、小牧長久手の戦で功績があった。信雄が豊臣秀吉に所領を没収された後も仕え、信雄の配流先で没した。その子与右衛門政景は堀尾吉晴に仕えていたが、徳川家康から小牧長久手の戦での戦功を評価され幕臣となった。寛永四年(一六二七)に堀尾忠晴の母長松院が死去した際にまとめた歌集の中に政景の和歌も載せられており、堀尾氏の家臣を離れてから後も縁があったと考えられる。しかし、同じ揖斐姓の堀尾采女や右近との関係は不明であった。

東京大学史料編纂所が所蔵する謄写文書の中に伊勢神宮の御師である遂沼家が所蔵していた文書があり、揖斐与右衛門からの文書や「揖斐家系図カ」(部分左記)があった。

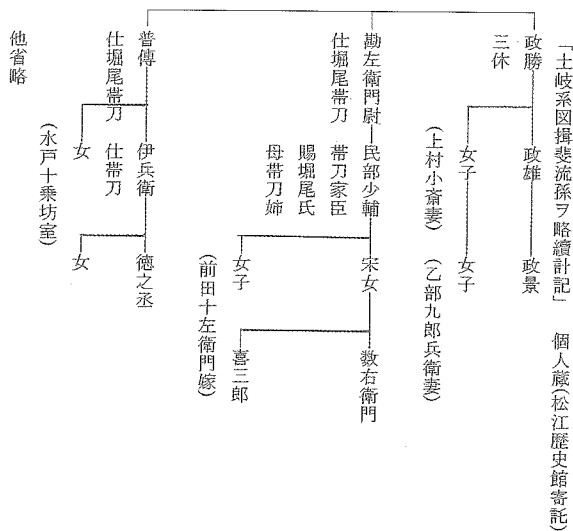


これは揖斐与右衛門の家を中心に書いた系図である。与右衛門政雄(八郎)の弟に揖斐普傳があり、普傳の家系に宮内、采女、右近の名が記されていた。このことから旗本揖斐与右衛門家と堀尾家の家臣となった揖斐家が一族であることが判明し、堀尾采女や右近が使用していた家紋は、桔梗または黒餅であった。松江歴史館敷地造成工事に伴う発掘調査で出土した桔梗紋の瓦は、堀尾采女と右近兄弟の屋敷に使用されていたと推定できる。

この普傳の家に關して、普傳の兄に勘左衛門がおり、早世したため、普傳の家と一つにしたと書かれている。

堀尾家の菩提寺である京都の春光院が所蔵する「堀尾近代系図並外孫縁者之略覚」<sup>(2)</sup>には、揖斐勘左衛門は堀尾吉晴の姉を妻とし、織田信長に仕えた。勘左衛門は伊勢国の長島で討死したと記されている。信長による伊勢攻めが元龜元年(一五七〇)から天正二年(一五七四)のことであり、この時に討死したものと考えられる。吉晴が三十歳前後の時である。勘左衛門の子民部はまだ幼少であったのだろう。弟で後に吉晴に仕えた普傳に養われたようである。系図には勘左衛門は若死にしたため、弟の家と同一にすると記されたのであろう。

また、近年松江市が寄託を受けた松江藩松平家の家老である乙部家の史料の中に「土岐系図揖斐流孫ヲ略統計記」<sup>(2)</sup>(部分左記)があった。



民部は吉晴の甥であり、堀尾姓を与えられている。しかし、『断家譜』で民部の兄弟として書かれている揖斐伊豆は、揖斐姓のままである。揖斐伊豆は「揖斐家系図カ」や「土岐系図揖斐流類孫ヲ略統記」では普傳の子と記されており、吉晴の姉の子ではない。このことから、堀尾采女と揖斐伊豆は兄弟として記されても、堀尾家の血縁である民部に堀尾姓が与えられ、伊豆は揖斐姓のままであったと考えられる。この系図が乙部家に伝わったのは、乙部家の初代九郎兵衛可正の妻が揖斐与右衛門政雄の妹であったため、揖斐家の系図が伝わったのだろう。乙部九郎兵衛の妻の母と堀尾民部とはいとこ同士であった。

### 3 堀尾家断絶後の堀尾采女と右近

寛永一〇年（一六三三）九月に堀尾忠晴は三五歳で病死した。忠晴には跡を継ぐべき男子がいなかったため、幕府により所領を没収され、堀尾家は断絶することになった。このため堀尾家の家臣らは四散し、以降の堀尾采女や右近の記録は非常に限られたものになる。この項では、堀尾家断絶後の堀尾采女と右近の動きを考察する。

忠晴が死去した一か月半後には、松江城下の堀より内側に住む家臣は幕府に屋敷を明け渡している。<sup>23</sup> 采女と右近もこの時に殿町の屋敷を明け渡したものと考えられる。家臣の一人、堀尾但馬はこの後京都に移り、翌年二月一三日に堀尾采女ら堀尾家の旧臣十名と江戸で酒井忠勝ら幕府の老中へ堀尾家の家名存続を願っている。采女はこの後京都に戻ったらしく、同年六月二十八日には旧臣六名と高野山へ上り、二月一日に再び江戸へ向かっている。<sup>24</sup> 采女の記録はこれを最後に無くなる。東京都文京区の養源寺にある堀尾忠晴の墓所の傍らには、采女の戒名である大用淨輔居士と記さ

れた宝篋印塔があり、命日が寛永二年（一六四四）五月十九日と書かれている。<sup>25</sup>

右近については、断絶後の記録が一切ない。ただ堀尾忠晴の菩提所である松江市栄町の圓成寺の過去帳には、寛永一七年（一六四〇）五月に堀尾右近の息子である清吉が一歳で没したことが記されており、断絶後も松江と何らかの関わりを持っていた可能性がある。

彼らの子孫については、家系図により采女には数右衛門や角右衛門、喜三郎という息子がいたようである。これらの仕官先や子孫は全くわからない。

ただ、揖斐系統の堀尾家の可能性を秘めた細川藩士がいる。熊本藩の細川家には、堀尾姓の藩士がおり、その初代は堀尾武右衛門といった。<sup>27</sup> 武右衛門は寛文七年（一六六七）七月に細川綱利に召し出され、三百石を拝領し、元禄十一年（一六九八）に隠居している。四代目は堀尾吉晴の幼名と同じ茂助を称している。堀尾武右衛門家は、亀甲に桔梗紋と分銅紋を家紋としている。<sup>28</sup> 仕官に際しては、松平隼人正重次の依頼であったと記されている。松平隼人正重次は幕府の旗本で、揖斐与右衛門の娘を妻としている。<sup>29</sup> 堀尾采女と右近の系図には武右衛門という人物は書かれていないため断定はできないが、家紋の桔梗紋と仕官の仲介をした人物が揖斐家の縁者という関係から揖斐家系統の堀尾家、つまり采女家か右近家の人物と推定できる。堀尾武右衛門家は熊本藩士として幕末を迎え、最終的には八百石を給した。

### おわりに

本稿では、桔梗紋の瓦が出土した土層面が堀尾氏による城下造成の時期

であること、その当時の屋敷の主が堀尾采女と堀尾右近であることを確認した。また、采女と右近の兄弟は、旗本の揖斐与右衛門と同じ一族であり、このことから使用していた家紋が桔梗と黒餅であることが判明した。これらのことから、松江歴史館の地下から出土した桔梗紋の軒丸瓦は堀尾采女または右近兄弟の屋敷に使用していたものであると言えよう。

注

- (1) 『松江城下町遺跡(殿町二八七番地)・(殿町二七九)発掘調査報告書』本文編、松江市教育委員会 財松江市教育文化振興事業団、二〇二一年。
- (2) 島根大学附属図書館蔵。
- (3) 丸亀市立資料館蔵。
- (4) 島根大学附属図書館蔵 桑原文庫。
- (5) 1に同じ。
- (6) 西尾克己、稲田信、佐々木倫朗「白華山養源寺(東京都千駄木)に所在する近世大名堀尾忠晴石塔について」、『松江歴史館研究紀要』第一号所収、二〇二一年、松江歴史館。
- (7) 「出雲・隠岐堀尾山城守家中給地帳」、春光院蔵、『松江市歴史叢書1』所収、二〇〇七年、松江市教育委員会。
- (8) 「堀尾古記」個人蔵、「新修島根県史」史料篇(二)近世(上)所収、一九六五年、島根県。
- (9) 清水寺棟札(元和四年)「堀尾氏三代の国づくり」所収。
- (10) 「神魂社造營遷宮記録」、『出雲意宇六社文書』所収、一九七四年、島根県教育委員会。

- (11) 国立公文書館蔵。
- (12) 『断家譜』堀尾の頁。
- (13) 6の清水寺棟札に、堀尾民部少輔一信と名が記載されている。
- (14) 8に同じ。
- (15) 「寛永十年城安寺返却状」、『八束郡誌 文書篇』善光寺文書所収、一九七三年、奥原福市。
- (16) 「堀尾家略系図」、亀山市歴史博物館蔵、亀山藩石川家には堀尾忠晴の娘が嫁いだ。この系図は亀山藩の家老が所蔵していた。
- (17) 「揖斐氏系図力」東京大学史料編纂所蔵、『賜蘆文書』謄写本。
- (18) 7に同じ。
- (19) 『寛政重修諸家譜』揖斐政雄、政景の頁。
- (20) 「長松院御辞世」、天理図書館蔵、堀尾忠晴の次に歌の記載あり。
- (21) 「堀尾近代系図並外孫縁者之略覚」春光院蔵、堀尾家の親類縁者を記す家系図。
- (22) 個人蔵、松江歴史館寄託。
- (23) 8に同じ。
- (24) 8に同じ。
- (25) 6に同じ。
- (26) 圓成寺蔵の過去帳に、寛永一七年五月二十九日に「玉巖紹清禪定門 堀尾右近殿子息清吉一歳」と記載されている。
- (27) 「先祖附」、永青文庫蔵、堀尾恩次郎の頁。
- (28) 「御侍帳(家紋入)」、『熊本藩侍帳集成』所収、一九九六年、松本寿三郎。
- (29) 『寛政重修諸家譜』、松平重次の頁。

(しんしょう・まさのり 松江歴史館学芸員)

# 松江歴史館 研究紀要

## 第2号

|   |             |        |
|---|-------------|--------|
| 渡部彝の復権と周辺の間人模様 .....                    | 関 和彦 .....  | 1      |
| 「松平齊貴上京行列図」に見る大名行列の構造 .....             | 松原 祥子 ..... | 15     |
| 幕末の松江渡海場 ——「御用留 船目代六右衛門」をよむ—— .....     | 多久田友秀 ..... | 36     |
| 松江城下町遺跡出土の桔梗紋の瓦を使用した家について .....         | 新庄 正典 ..... | 56     |
| 島根県初の私立和洋画学校「方圓学舎」入門者一覧 .....           | 西島 太郎 ..... | 61     |
| 松江藩領全域をおおう「輪切絵図」 ——安定的な年貢確保を目的に—— ..... | 上杉 和央 ..... | 78(11) |
|   | 大矢 幸雄       |        |
|   | 石倉 舞美       |        |
| 松江藩で利用された花崗岩類 .....                     | 朽津 信明 ..... | 88(1)  |
|   | 西尾 克己       |        |
|   | 稲田 信        |        |

平成24年3月

 松江歴史館

# MATSUE HISTORY MUSEUM

## BULLETIN

---

No.2 MARCH, 2012

---

### CONTENTS

|   |                |
|---|----------------|
| Watanabe Tsune:An examination of his resurgence and<br>influence on his peers. -----SEKI Kazuhiko----   | 1              |
| Structure of feudal lord's procession seen in the<br>"Figure of procession of Matsudaira Naritake visit to Kyoto" -----MATSUBARA Sachiko----                  | 15             |
| A basic study of the privileged group of sailors in Matsue<br>in the end of Edo Period -----TAKUDA Tomohide----   | 36             |
| The house which uses roof-tiles dug up from the remains of Matsue castle town.<br>The roof-tiles have Japanese bellflower ornaments.-----SHINSYO Masanori---- | 56             |
| A private art school was established for the first time in<br>Shimane Prefecture "HOENGAKUSYA" list of students enrolled -----NISHIJIMA Taro----              | 61             |
| "Wakiriezu" : Atlases Showing Land Tax Collectiion<br>in the Matsue Domain -----UESUGI Kazuhiro----   | 78(11)         |
|   | OYA Yukio      |
|   | ISHIKURA Maimi |
| Granitic rocks used in Matsue-han , Shimane Prefecture in -----KUCHITSU Nobuaki----   | 88(1)          |
| early-modern age  | NISHIO Katsumi |
|   | INATA Makoto   |

---

Published by  
Matsue History Museum  
Matsue, Japan

平成二十四年(二〇二二)三月三十一日印刷  
平成二十四年(二〇二二)三月三十一日発行

松江歴史館研究紀要 第二号

編集発行 松江歴史館

住所 島根県松江市殿町二七九番地

〒六九〇一〇八八七

電話 〇八五二一五五一五五一

FAX 〇八五二一三二一六六一

印刷所 千鳥印刷(株)

住所 島根県松江市黒田町四八四一五

〒六九〇一〇八七六

電話 〇八五二一七一七五五

FAX 〇八五二一七六九一七